

## 2 流域及び河川の自然環境

### 2-1 自然環境

#### (1)流域及び河川の自然環境

##### 源流域

源流付近には、丘陵地や台地が浸食され複雑に刻まれた地形である谷戸が多く残り、水と緑のネットワークが形成されており、鶴見川流域における生物多様性の最大の拠点でもある。

谷戸群とそれらをつなぐ水域は、絶滅危惧種であるホトケドジョウの流域最大の生息地である。自然地として保全されている源流の泉周辺には、平成7年、町田市が「鶴見川源流泉のひろば」を開設、また、市民団体が管理会を設立し、市と市民が協働で管理作業にあたっており、水生動物や湿生植物の保全・回復も進み、流域の新しい交流拠点になっている。また、町田市小山田緑地も、市民団体が参加する方式で、谷戸の水域の保全・管理作業を行っている。



写真 2-1-1 源流泉の広場  
出典 :京浜河川事務所



写真 2-1-2 鶴見川源流の市民団  
体によって管理されている「源  
流泉の広場」  
出典 :京浜河川事務所

##### 上流域

多摩丘陵を流下する上流域では、大規模な開発が進んだことにより沿川の谷戸などの自然環境はほとんど消滅し、農地も減少した。しかし、現在でも寺家川の源流域の「寺家ふるさと村」と呼ばれる地域では、農業を守りながら谷戸群の森や水域の保全が図られているところもある。

また、河川の河岸はコンクリートブロックの護岸で整備されている区間が多く恵まれた環境にはないが、生物の生息・生育も確認されている。



写真 2-1-3 寺家ふるさと村の沿川農地  
出典 :京浜河川事務所



写真 2-1-4 コンクリートブロック護岸 (支川)  
出典 :京浜河川事務所



写真 2-1-5 コンクリートブロック護岸 (本川)  
出典 :京浜河川事務所

## 中流域

中流域は、下末吉台地に挟まれた沖積低地に位置し、新横浜などの市街地が形成され、沿川には農地がわずかに残されている。河川の自然環境は、比較的豊かであり、生物多様性の点で注目すべき様相も少なくない。この区間の両岸には高水敷が形成され、ヨシ・オギを中心とした群落に多様な生物相が見られる。特に、高水敷には、絶滅危惧種のヨコハマナガゴミムシの国内唯一の生息地が確認されている。



写真 2-1-6 オギ・ヨシの繁茂している高水敷  
出典 :京浜河川事務所



写真 2-1-7 オギ・ヨシの繁茂している高水敷  
出典 :京浜河川事務所

## 下流域

河口に向かって広がる沖積平野を流下する下流域には、事業所や住宅が密集し、また、河口付近は多くの埋め立てが行われ、京浜工業地帯が立地している。矢上川合流付近の高水敷や砂州には、水辺の植物群落が発達して野鳥や甲殻類などが多く確認されている。また、海水の進入する感潮域であり汽水・海水性の魚類も多く確認されている。

矢上川合流点から下流は高水敷を伴わず水辺に植物は乏しいが、水域には多様な魚類が確認される。



写真 2-1-8 密集市街地の状況(0.0k付近)  
出典 :京浜河川事務所



矢上川

写真 2-1-9 矢上川合流点(7.0k)付近の植生  
出典 :京浜河川事務所

## (2) 動植物の生息状況

### 魚類

本川・支川の源流部に広がる谷戸が水を支え、湧水などにより細流が生まれ、生物の生育・生息環境を支えている。この水域には、ホトケドジョウ、ギバチ、スナヤツメ、メダカなどの魚類が生息している。

川底がコンクリートで被覆されていない流れのある上流域には、蛇行の有無に関わらず瀬・淵が形成され、タモロコ、コイなどが生息し、水量の比較的多い中流部から下流部にかけては、水際にヨシなどの水生植物の群落が形成され、オイカワ、モツゴなどの魚類が生息しアユなどの回遊魚も見られる。

下流域の標高の低い沖積低地は潮汐の影響を受け、この区間では汽水域に生息する種であるスズキ、マハゼなどがみられる。

魚類に関わる重要な種は、絶滅危惧に該当するものが8種確認され、このうち、ホトケドジョウ、ギバチ、スナヤツメ、メダカの4種が環境省レッドデータブックの指定種となっている。

源流～上流  
《ホトケドジョウ》  
「重要な種 レッドデータブックEN」



水が冷たくて澄んだ、流れの緩やかな細流などの、砂礫ないし砂泥底の水草のあるところに生息する。湧水のあるきれいな小川や池を好み、中層を緩やかに遊泳する。成魚は浮遊動物から底生動物までを広く摂餌し、小魚を追いかけて捕食することもある。

【出典：川の生物図典 1996年(株)山海堂】  
【出典(写真)：京浜河川事務所】

源流～上流  
《ギバチ》  
「重要な種 レッドデータブックVU」



水のきれいな河川の上流域から中流域にかけて生息するが、仔稚魚は秋には大きな河川の下流に下る。成魚は、昼間は湖沼や河川の岸近くにある石の隙間や石垣の中などに潜み、夜間や降雨による濁水時などに活動する。定住性が強く、年周移動の範囲は狭い。稚魚は半底半性の浮遊動物や小型の底生動物を食べる。成魚は水生昆虫やエビ、小魚を食べる。

【出典：川の生物図典 1996年(株)山海堂】  
【出典(写真)：京浜河川事務所】

源流～上流  
《スナヤツメ》  
「重要な種 レッドデータブックVU」



幼生・成魚とも、水の澄んだ流れの緩やかな浅い細流に生息する。増水の影響を受けない場所で、湧水のある、砂底泥のところを好む。幼生は、底泥上・底泥中の有機物や珪藻類を濾過して食べる。成魚になると食物を食べない。

【写真提供：君塚】

【出典：川の生物図鑑 1996年(株)山海堂】

上流  
《メダカ》  
「重要な種 レッドデータブックVU」



河川下流にある水たまり、水田とその小水路、浅い池沼など、止水域に広く生息する。顕著な昼行性で、明るくなると活動し、日中は浅いところで盛んに摂餌する。夜間は日中より少し深いところや、水草の中で過ごす。動・植物プランクトンを食べる。また小さな落下昆虫なども捕食する。

【出典：川の生物図典 1996年(株)山海堂】  
【出典(写真)：京浜河川事務所】

## エビ・カニ・貝類

上流域は、砂礫～砂の河床が多く、流水域に生息する種が見られる。しかし、周辺からの汚水の流入や、河川水がよどんだ所などでは、やや汚れた水に生息するサカマキガイやカワコザラガイが見られる。中流域では河床が砂～細砂となっており、テナガエビやスジエビなどの比較的、止水域に生息する種が多くなる。下流域では、ケフサイソガニやユビナガスジエビなどの汽水・海水域に生息する種へ変化する。

エビ・カニ・貝類に関しては、環境省レッドデータブックの指定種となっている重要な種は確認されていない。

### 上流 《サカマキガイ》



平野部の川や池、水路、人家に近い下水溝などにも生息する。水質汚濁に強く、ビルの地下の排水溝でも見られる。乾燥にも寒さにも強い。水草やヨシの葉の裏、水路の壁面などに付着して生活する。主に植食性で、微少な藻類をやすりのような歯舌で削り取って摂餌する。

【出典：川の生物図典 1996年(株)山海堂】  
【出典(写真)：京浜河川事務所】

### 中流 《スジエビ》



沼、池、湖など。ときに汽水域にも生息し、河口域から上流域にまで分布する。  
稚エビはミジンコ、水生植物、魚の死体などを食べて成長する。  
成体も雑食性。

【出典：川の生物図典 1996年(株)山海堂】  
【出典(写真)：京浜河川事務所】

### 上流 《カワコザラガイ》



池・沼のハス、スイレンの茎や葉に付着あるいは浮遊物に付着する傘形の貝殻。

【出典：改訂 埼玉県レッドデータブック 動物編 2002 埼玉県】  
【出典(写真)：京浜河川事務所】

### 下流 《ケフサイソガニ》



石の多い海岸や河口の潮間帯に多く生息する。河口干潟では転石の下などに多い。  
砂泥中の有機物を主食とする。

【出典：川の生物図典 1996年(株)山海堂】  
【出典(写真)：京浜河川事務所】

### 中流 《テナガエビ》



比較的低位の河川・湖・池沼などに生息し、特に河口域や汽水湖に多い。河川では流れの緩やかな砂泥底にすみ、昼間は石の下や物陰に潜み夜間に活動する。

雑食性で、主に夜間に石の下などから這い出して餌をあさる。

【出典：川の生物図典 1996年(株)山海堂】  
【出典(写真)：京浜河川事務所】

### 下流 《ユビナガスジエビ》



(ユビナガスジエビの同属のスジエビを参考とした。)沼、池、湖など、ときに汽水域にも生息し、河口域から上流域まで分布する。

ゾエア幼生はワムシなどを餌としているが、稚エビはミジンコ、水生植物、魚の死体などを食べて成長する。成体も雑食性。

【出典：川の生物図鑑(1996年 (株)山海堂)】  
【出典(写真)：京浜河川事務所】

## 植物

上流域は、コンクリートブロックの護岸で整備されている区間が多いが、砂がたまり、州が張り付いている部分にはオギやミゾソバ、セリ、クサヨシ等の群落が見られる。中流域は、川幅も広く高水敷が見られ、自然河岸の形成されている箇所では、メヒシバ、ヨシ、オギ群落が見られる。下流域は、直立護岸で整備されているが、一部の水際部に植生が見られる。

植物に関する重要な種は、絶滅危惧に該当するものが4種確認され、このうち、タコノアシ、カンエンガヤツリ、の2種が環境省レッドデータブックの指定種となっている。

上流～下流  
《タコノアシ》

「重要な種 レッドデータブックVU」



【写真提供：奥田】

泥湿地、沼、水田、河川敷のヨシ原の周囲などに生育し、休耕田にも多い。湿地等の水位の変動する場所に多く生育する。

【出典：川の生物図典 1996年(株)山海堂】

上流～中流  
《カンエンガヤツリ》

「重要な種 レッドデータブックVU」



【写真提供：奥田】

河川の水辺のほか、全国各地の沼沢池、水田地帯の水路などに生育する。草丈40～100cmの1年草のカヤツリグサである。湿地にまれに生えて群落をつくる。

【出典：川の生物図典 1996年(株)山海堂】

## 鳥類

流域の市街化によって自然の生息地は各所で分断・縮小を余儀なくされているが、点在する丘陵・台地の谷戸などや川辺には生息地が残されており、多くの鳥類を確認することができる。源流付近の森や谷戸ではオオタカをはじめとする猛禽類がみられ、上流域の水辺にはコガモやカルガモが多く見られる。中流域では、水面にカワウやコガモが多く見られ、高水敷のヨシやオギ群落にはオオヨシキリやセッカ等が生息している。下流域は、ユリカモメやホシハジロ等の河口域でよく見られる種が生息している。

鳥類に関する重要な種は、絶滅危惧に該当するものが4種確認され、このうち、オオタカ、コアジサシの2種が環境省レッドデータブックの指定種となっている。

源流～上流  
《オオタカ》

「重要な種 レッドデータブックVU」



【出典：京浜河川事務所】

【出典(写真)：京浜河川事務所】

山陰～近畿以北で繁殖。秋冬はほぼ全国。平地から山地の樹林に生息。全国的には留鳥だが、多摩川では冬鳥。林の大木の枝上に枯れ枝で巣をつくる。春から夏が繁殖期。小鳥、ハト、カモ、キジなどの鳥類を主に食べる。

下流  
《コアジサシ》

「重要な種 レッドデータブックVU」



【写真提供：鈴木(茂)】

大きな川の中州や河岸、湖岸、海岸の砂礫地や、海岸の貝殻まじりの砂地、埋立地などの地上に生息し、コロニーをつくる。魚食性で小魚を捕食する。

【出典：川の生物図典 1996年(株)山海堂】

## 両生類・爬虫類・哺乳類

源流域ではイタチ、上流域では、高水敷にモグラ、アカネズミ、カナヘビ、アオダイショウ等の種が生息している。中流域では、周辺が市街地となっているが、比較的広い高水敷を有し、モグラ、アカネズミ、カナヘビ等の都市域でも生息している種がみられる。下流域は、高水敷もなく生息環境が存在していない。

両生・爬虫・哺乳類に関しては、環境省レッドデータブックの指定種となっている重要な種は確認されていない。

### 両生類

上流  
《アマガエル》



平地や低山地の林・草原・生垣など低い木や草の上で生活する。繁殖期は5～7月頃で水田や水たまりなど浅い止水に卵塊を産む。

【出典：日本の両生類・爬虫類 小学館】  
【出典(写真)：京浜河川事務所】

### ・哺乳類

上流～中流  
《アカネズミ》



体長 10cm ほど。低地から山地にすむ野ネズミ。植物の根やドングリ、種、昆虫を食べる。

【出典：京浜河川事務所】  
【出典(写真)：京浜河川事務所】

### ・爬虫類

《カナヘビ》



平地や低山地の堤・草原・やぶ・庭先などにすむ。

【出典：日本動物大百科 1～10 平凡社】  
【出典(写真)：京浜河川事務所】

上流～中流  
《イタチ》



平地から山地にまですみ、人家の近くにも姿をみせる。土の中に巣をつくり、魚やカエル、ネズミなどを食べる。

【出典：京浜河川事務所】  
【出典(写真)：京浜河川事務所】

## 陸上昆虫類

上流域では、河岸に繁茂する草地に生息するブタクサハムシやヒメカノコテントウ、モンシロチョウ等がよく見られる。中流域でも上流域と同様、草地に生息するブタクサハムシ、モンシロチョウ、キタテハ等がよく見られる。しかし、下流域には高水敷が無く確認されていない。陸上昆虫類に関する重要な種は、絶滅危惧に該当するものが6種確認され、このうち、ヨコハマナガゴミムシが環境省レッドリストに指定されている。

中流  
《ヨコハマナガゴミムシ》  
「重要な種 レッドリストCR+EN」



鶴見川中流域の草地環境のみに生息している。

【出典：京浜河川事務所】  
【出典(写真)：京浜河川事務所】

表 2-1-1 特定種の選定基準一覧表

番号	法令・文献の名称	記号	カテゴリー区分
(1)	改訂・日本の絶滅のおそれのあるレッドデータブック野生生物(哺乳類 2002 年、鳥類 2002 年、爬虫類・両生類 2000 年、汽水・淡水魚類 2003 年、維管束植物 2000 年)(環境省編)及び無脊椎動物(昆虫類、貝類、クモ類、甲殻類等)のレッドリスト(2000 年、環境庁報道発表)	C R	絶滅危惧 A 類
		E N	絶滅危惧 B 類
		V U	絶滅危惧 類
		N T	準絶滅危惧
(2)	神奈川県レッドデータ生物調査報告書(1995、神奈川県生命の星・地球博物館)	D	危惧 D
		E	危惧 E
		E (繁殖期)	危惧 E (繁殖期)
		F	危惧 F
		G	減少 G
		I * (繁殖期)	希少 I * (繁殖期)
(3)	東京都の保護上重要な野生生物種(1998、東京都)	A	絶滅の危機に瀕している種
		B	絶滅の危機が増大している種

出典 :京浜河川事務所

表 2-1-2 特定種一覧表 (1)

分類	番号	種名・群落名	選定根拠			生息環境等	河川区分			
			(1)	(2)	(3)		下流	中流	上流	その他
魚類	1	スナヤツメ	VU	危惧 E	A	水の澄んだ流れの緩やかな浅い細流に生息。増水の影響を受けない場所で、湧水のある、砂低泥のところを好む。				堂谷戸川でも確認
	2	ホトケドジョウ	EN	危惧 F	B	湧水を水源とする細流、湿原や水田周りの小溝に生息する。				細流の谷戸部でも確認
	3	ギバチ	VU		B	流れのある比較的水のきれいな河川の中流から上流下部域に生息する(岩や石の下、石垣の間隙、ヨシの間や倒木の下に棲む)				旧スギ谷戸の流れの箇所確認
	4	メダカ	VU	危惧 F	A	生息環境は、下流河川の緩流部、ため池、用水路、水田や水田の導・排水溝。また、多くはないが、汽水域などの塩分の耐性にも強い。				
	5	マゴチ		危惧 D		内湾に生息し、幼魚期のものが汽水域に侵入する。				
	6	カワアナゴ		危惧 E		川の上流域下部から中流までの淵を中心に生息する。水田の用水路や池などに出現する場合には、地下水が豊富に湧く環境であることが多い。				
	7	ウキゴリ		危惧 E		流れの緩やかな河川の中下流域に生息する。				
	8	ビリンゴ		危惧 E		河口の泥底の汽水域に群れで生息する。				
底生動物		該当無し								
哺乳類		該当無し								
鳥類	1	ヨシゴイ		危惧 E (繁殖期)		水田、湿地、ヨシ原などに生息する。日本には夏鳥として渡来し、繁殖する。				
	2	オオタカ	VU	希少 I * (繁殖期)	B	森林内や森林に隣接した草地や農地で、主にハト類など鳥類を採餌する。				
	3	コアジサシ	VU	危惧 F (繁殖期)	B	日本には、夏鳥として渡来し繁殖する。海岸や河川、湖沼などの水辺に生息し、砂浜海岸や河川敷の砂礫地を利用して集団で繁殖する。				

出典 :京浜河川事務所

表 2-1-3 特定種一覧表 (2)

分類	番号	種名・群落名	選定根拠			生息環境等	河川区分			
			(1)	(2)	(3)		下流	中流	上流	その他
鳥類	4	コサメビタキ		危惧 E (繁殖期)		夏鳥として、丘陵地の雑木林に渡来する。				
爬虫類		該当無し								
両生類		該当無し								
昆虫類	1	ハネナガイナゴ		危惧 F		水田に普通に見られるが、河原の草地にも生息する。				
	2	アリスアトキリゴミムシ		危惧 E		よく知られていないが、草丈の低い荒れ地に生息するようである。				
	3	オビモンコミズギワゴミムシ		危惧 F		河川敷の落葉下に生息する。				
	4	アトモンコミズギワゴミムシ		危惧 E		畑地周辺のスギゴケの生育する草地、公園などの同様な草地。湿り気があるが日の当たる明るい環境を好む。				
	5	ヤマトヒメメダカカッコウムシ		危惧 D		河口付近のヨシ原に生息する。				
	6	ヨコハマナガゴミムシ	CR + EN	危惧 D		鶴見川の中流域の草地環境のみに生息している。				
植物	1	タコノアシ	VU		A	泥湿地、沼、水田、川原などで、水位の変動する場所に多い。				
	2	ミゾハコベ			A	水田や溝、湿地などに生える小型の1年草。				
	3	ミゾコウジュ	NT		A	河川敷や水田の畦など湿った草地に生える越年草。				
	4	カンエンガヤツリ	VU	減少 G	B	湿地に生育し群落をつくる多年草。				

出典 :京浜河川事務所

## 2-2 特徴的な河川景観と文化財

### (1)特徴的な河川景観

河川改修の過程で形成された都市河川の景観

鶴見川では、急激な市街化の進行と度重なる出水被害に対し、洪水を安全に流下させる河道改修が最優先となり、河道の直線化、堤防法面のコンクリート化、限られた用地で対応するため急傾斜での護岸整備などが行われてきた。これによって治水安全度は飛躍的に向上したが、洲の形成や澁筋の変化等の、“川が見せる自然のダイナミズム”を有する変化に富んだ多種、多様な景観の多くが姿を消した。

また、河岸に連続していた緑の消失や、水面と高低差のある急勾配の護岸形態は、河川水質など水環境の悪化と相まって、まちや人が川に背を向け、川・水との関わりを遠ざける環境と景観の形成をもたらすものとなった。

都市域に残された貴重な自然環境への意識転換

近年では、下水道整備等による河川水質の改善や環境意識の高まり、活発な市民団体の活動・情報発信などもあり、源流域のまとまった緑地や市街地に点在する緑地とともに、これらを結ぶ河川の水と緑が都市域にとって貴重な自然環境であることの認識が高まりを見せている。また、大規模な河道改修が行われ20年近く経過し、支川合流部などを主体に洲が形成され、河岸には豊富な植生が回復した区間や多種多様な生物の生育、生息、繁殖が確認されるようになっている。

このような背景から、地域からプロムナードや親水護岸などの整備を求める声が多くなっている。また、地域自ら川と一体的な空間として、沿川の開発に伴う公開空地の川側への配置や公園整備、さくらの植樹など、水辺とのふれあい促進に向けた様々な整備、工夫も行われるようになってきている。まさに河川を活かしたまちづくりが動きだし、流域の水と緑のネットワークを形成、都市と自然が共存する広域の自然景観として、また、地域のまちづくりと調和する自然景観として、河川景観は今後も変化していくものと考えられる。



写真 2-2-1 高低差のある急傾斜のコンクリート護岸（支川矢上川）



写真 2-2-2 下流部のコンクリートと矢板の護岸（6k付近）



写真 2-2-3 支川早淵川合流部に形成された洲



写真 2-2-4 川側への公開空地の配置（2k 右岸）



写真 2-2-5 川沿いに整備された公園（新横浜駅前公園）

出典：京浜河川事務所

(2)文化財（史跡・名勝・天然記念物）

鶴見川流域内の文化財のうち、史跡・名勝・天然記念物は、国指定が2件、都県指定が12件の合計14件である。史跡が多いが「旧城寺の寺林」等、寺や神社に関わりのある天然記念物、名勝も4件指定されている。



図 2-2-1 史跡・名勝・天然記念物の位置図 出典 :京浜河川事務所

表 2-2-1 史跡・名勝・天然記念物の一覧

名称	所在地	分類・区分
大塚・歳勝土遺跡	横浜市都筑区中川町 他	史跡・国指定史跡
高ヶ坂石器時代遺跡	町田市高ヶ坂 1418, 1429 他	国指定史跡
市ヶ尾横穴古墳群	横浜市青葉区市ヶ尾町 1639-2	史跡・神奈川県指定史跡名勝天然記念物
稲荷前古墳群	横浜市青葉区大場町 156-10 他	史跡・神奈川県指定史跡名勝天然記念物
旧城寺の寺林	横浜市緑区三保町 2029-1 他	天然記念物・ 神奈川県指定史跡名勝天然記念物
師岡熊野神社の社叢林	横浜市港北区師岡町字表谷戸	天然記念物・ 神奈川県指定史跡名勝天然記念物
春日神社・常楽寺及びその周辺の樹叢	川崎市中原区宮内	史跡・神奈川県指定文化財
子母口貝塚	川崎市高津区子母口 54-148 他	史跡・神奈川県指定文化財
馬絹古墳	川崎市宮前区馬絹 994-8	史跡・神奈川県指定文化財
西福寺古墳	川崎市高津区梶ヶ谷 3-17	史跡・神奈川県指定文化財
小山田一号遺跡	町田市小山田桜台 2-16-6	東京都指定史跡
本町田遺跡	町田市本町田 3455	東京都指定史跡
西谷戸横穴墓群	町田市三輪緑山 1-25-7	東京都指定史跡
福王寺旧園地(薬師池公園)	町田市野津田町 3270	東京都指定名勝

出典 :京浜河川事務所

## 2-3 川にまつわる歴史・文化

### (1) 農業と水害の歴史・文化

鶴見川の沿川には、かつて農業が盛んであったことを物語る神社・史跡、祭等があり、その一つとして挙げられる「鶴見神社」では、700年前から伝わる民俗芸能「鶴見の田祭り」が今でも盛大に行われている。また、水にかかわる<sup>ほころ</sup>祠や神社、仏像が今でも散在している。

農業の歴史・文化を伝えるものは、市街化の進展と農業の衰退に伴い減少し、今ではほとんどみられなくなったが、当時の面影を残すものとして、寺家ふるさと村の水車や三ツ池公園の溜池等があり、現在は主に観光施設として利用されている。



写真 2-3-1 鶴見神社  
出典：京浜河川事務所



写真 2-3-2 川向堰周辺の水神社  
出典：京浜河川事務所



写真 2-3-3 「寺家ふるさと村」の水車  
出典：横浜市青葉区役所 ホームページ



写真 2-3-4 三ツ池公園  
出典：神奈川県観光協会 ホームページ

### (2) 東西の交流と舟運の歴史・文化

旧東海道に架かる鶴見川橋は、かつては「鶴見橋」と呼ばれ、幕末から明治初期の絵図にも描かれている。(この絵画には<sup>ほかけぶね</sup>帆掛舟や人力車、馬がみられ、東西を結ぶ重要な経路として、人々の交流が盛んに行なわれていたことが伺える。

また、鶴見川は比較的勾配の緩い川であり、江戸の昔から舟運は盛んで、大正末年まで帆船が往来し、米の他、乾物や日用雑貨、肥料等、様々なものが運ばれていた。

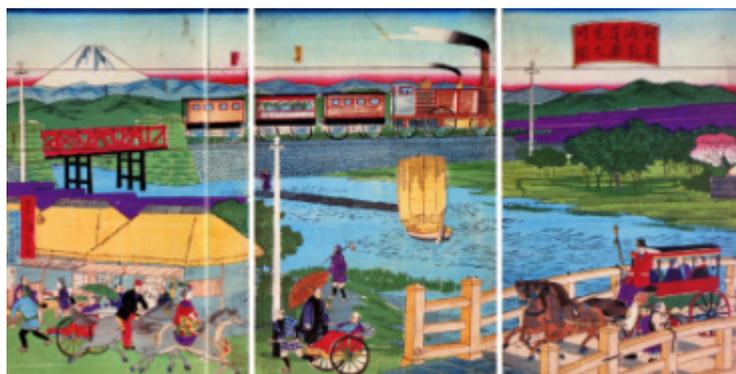


図 2-3-1 三代広重「川崎鶴見川蒸気車之図」  
出典：横浜開港資料館より

### (3)豊かな自然環境を有した流域の歴史・文化

流域を題材とした文芸作品としては、平安京時代以前の『万葉集』があり、室町時代の『東国紀行（谷宗牧）』や江戸時代の『甲申旅日記（小笠原長保）』には、流域の風景などの記述がみられる。

近代以降では、『春（島崎藤村）』、『田園の憂鬱（佐藤春夫）』、『釣りざんまい（中村星湖）』、『土埃（遠藤周作）』など、豊かな自然環境を彷彿させる小説や随筆の題材となっている。

流域を描いた絵図としては、初代安藤広重が描いた「東海道五十三次名所図絵」（神奈川県指定重要文化財）が挙げられる。

また、伝説・伝承には、池にすむへびや龍、川にすむカッパなどが登場し、流域内の小中学校の校歌には、「丘」、「芦」などの詞が多く用いられている等、鶴見川流域は元来、水と豊かな自然環境に恵まれた地域であったことが伺える。

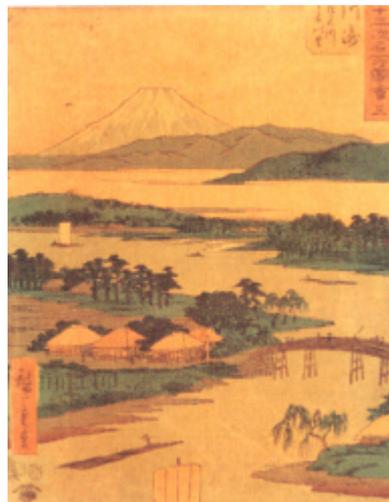


図 2-3-2 東海道五十三次名所図絵  
川崎 鶴見川 生麦の里  
出典：横浜開港資料館より

### (4)国際交流など、新たな流域の歴史・文化

鶴見川多目的遊水地内にある「新横浜公園」に立地する「横浜国際総合競技場」では、2002FIFA ワールドカップの決勝戦を含む 4 試合が開催され、国内外から集まった約 26 万人の観客で多いに賑わった。

この世界的なイベントの開催は、国際交流やスポーツ・レクリエーション活動を増進させると共に、流域に国際都市を擁する都市河川鶴見川の新たな歴史・文化を育むこととなった。



写真 2-3-5 横浜国際総合競技場  
出典：京浜河川事務所

### (5)流域の活発な市民活動から育まれる、新たな歴史・文化

古くは治水をめぐる住民活動に始まり、昭和 50 年代後半からは、水質の改善や貴重な自然地の保全等を目的とした、環境保全活動、まちづくり活動などを行う市民団体が登場してきた。

近年は行政と市民のパートナーシップによる取り組みも盛んであり、流域規模で連携する活発な市民活動が行われることにより、都市河川として貴重な自然環境を“流域”というフィールドで考える意識や、流域としての文化などが醸成され、発展していくことが期待できる。

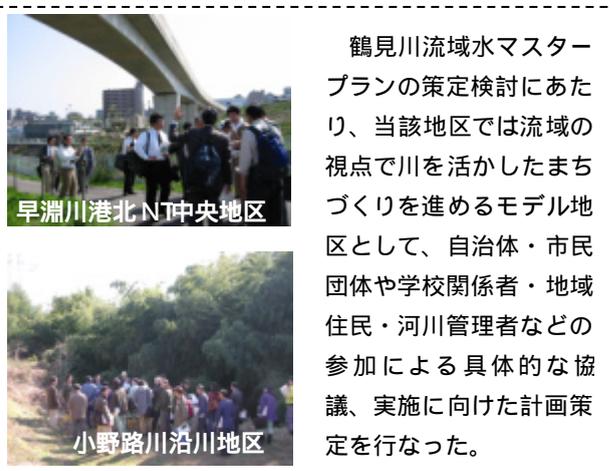


写真 2-3-6 行政と市民のパートナーシップによる取り組みの事例  
出典：京浜河川事務所